

本誌生みの親，岩月賢一先生の御霊に捧ぐ

前『ICUとCCU』編集委員長
(旭労災病院名誉院長・顧問)
勝屋 弘忠



岩月賢一先生 (1913～2013)

日本の麻酔科学の泰斗であり，集中治療医学会の創始者でもある岩月賢一先生が平成 25 年 11 月 10 日に逝去されました。先生はこの『ICUとCCU』誌の生みの親でもあります。ここに本誌の編集に永らく携わらせていただいた者の一人として，現編集委員会の方々や医学図書出版の関係者を代表し，謹んで追悼の辞を捧げます。

先生は昭和 49 年 2 月，日本における集中治療の普及を目的に ICU 研究会（のちの日本集中治療医学会）を設立され，第 1 回から第 3 回研究会まで会長を務められました。そして集中治療という，複数の診療科，多職種のチームワークで成り立つ新しい医療の発展のためには，当時わが国にはなかった集中治療の専門誌がぜひとも必要というお考えのもと，昭和 52 年医学図書出版社から『ICUとCCU』を発刊されました。先生は創刊号の巻頭言で「発刊のねらいは，本誌を通じて intensive care に関する知見を広め，わが国における ICU，CCU の発展に資することにある。」と述べられ，加えて，集中治療の特殊性から，この雑誌は医師のみでなく広く各種医療職の方々へも門戸を開くとも述べておられます。

先生は昭和 52 年の創刊から編集委員として本誌の充実に努力され，昭和 62 年に顧問になられてからも，平成 24 年，白寿を機に顧問を辞退されるまで英文校閲をされるなど，実に通算 36 年間本誌の

ために尽力されました。この間本誌は昭和 53 年第 2 巻から平成 10 年の第 22 巻まで 21 年にわたって日本集中治療医学会の準機関誌として、本邦の集中治療の発展に大いに寄与したことは衆目の一致するところですが。先生の意図された目的は十分に達成されたといえましょう。

私が編集委員会の末席に加えて戴いて以来、20 数年間ご一緒させていただきましたが、編集委員会ではとても厳格でした。医学図書出版の鈴木吉見前社長（故人）からは「昔はこんなものではなく、東北大学の教授室に伺う時は怖くてなかなか近寄り難かったですよ」とお聞きしたこともありますが、それでも謹厳な先生の前では緊張したものです。医学用語の用い方については特に厳しく、お叱りを受けることは何度もありました。『医語語源便覧』や『医語語源散策』を執筆された先生ならではのご指導を受け得たことは得難い経験です。委員会後の懇談の場では、古今東西の書籍、文献に精通しておられる先生が、穏やかなお顔でされる論語、仏教、哲学、文学その他、多岐にわたる含蓄に富んだお話は魅力的で、私など毎回先生のお話を伺えるのを楽しみにしていました。また先生はご自分にも厳しい方でした。喜寿を迎えても週に 2～3 回テニスで体を鍛えられておられましたし、編集委員会後も東京駅で並んで新幹線の自由席で仙台にお帰りになっていました。同じ編集委員で、福島に帰る奥秋晟先生（故人）が「私は指定席なのに親分（岩月先生）が自由席では具合が悪いなあ」とこぼしておられたのを思い出します。

このように『ICU と CCU』誌を生み育てられ、本邦の集中治療医学の発展に尽くされた先生のご功績を偲び、私たちにいただいたこれまでのご指導に感謝しつつ、先生のご冥福をお祈りいたします。

合掌

平成 25 年 12 月